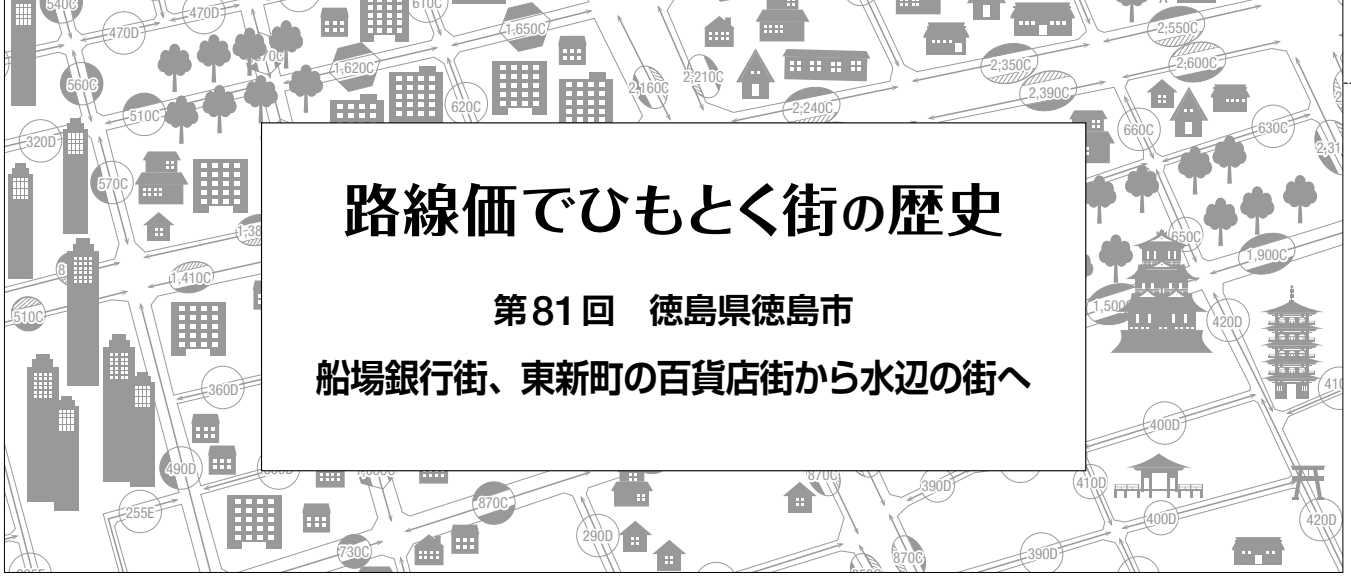


路線価でひもとく街の歴史

第81回　徳島県徳島市

船場銀行街、東新町の百貨店街から水辺の街へ

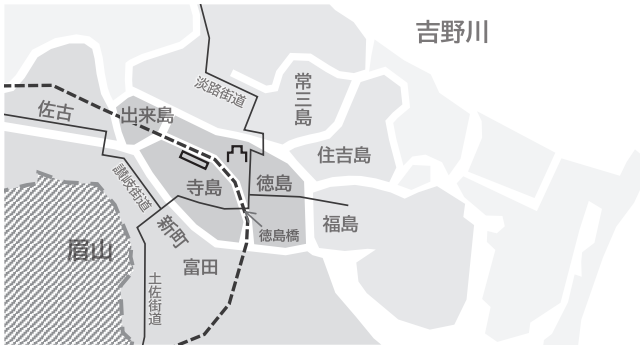
阿波への路

先般、徳島を訪れた。舞子駅で高速バスに乗り換え、明石海峡大橋を渡って淡路島を縦断した。高速舞子から徳島駅前までは約1時間半、片道3,300円である。このルートは、国道28号の海上区間を担った明石・岩屋間のフェリーに代わる道でもある。かつて四国への玄関口は明石だったが、いまは舞子だ。途中で通る淡路島の名は、「阿波への路」に由来するとされる。藩政期は徳島藩領で、稲田騒動が兵庫県編入の遠因とされる。都が奈良にあった時代、四国へ向かう官道・南海道は、紀伊の加太から淡路島の由良へ渡り、陸路を福良まで進み、再び海路で鳴門の撫養(むや)湊を目指した。

帰路は海路を選んだ。現在、南海フェリーが和歌山港と徳島港を結び、淡路島を経ずに直行している。大人片道2,500円。和歌山港では駅と乗船場が直結し、列車と船を乗り継げる。かつて徳島側の小松島港にも連絡駅があったが、牟岐線から分岐する盲腸線の小松島線とともに、昭和60年（1985）に廃止された。紀伊水道を渡るこの航路は、南海道の流れをくみ、鉄道連絡船の面影を残す。一方、運営する南海電鉄から令和10年（2028）3月末のフェリー事業撤退が発表された。

徳島は関西と海を隔てているが、歴史的、文化的なつながりが強い。いまも県内の民放テレビは四国放送の1局で、他系列は海を越えて届く近畿広域圏の局を直接またはケーブルテレビで見るのが一般的だ。さかのぼれば徳島は蜂須賀家政が築いた城下町である。新町川や助任川などが流れるデルタに徳島、寺島、福島、住吉島、常三島、出来島の6つの島があり、城はそのひとつ、徳島の城山（猪山）にあった。新町川の南には商人や職人が住む新町が置かれた。城の大手には、武家地の徳島と商人町のある寺島を結ぶ徳島橋が架かり、明治に入ると最初の里程元標が置かれた。橋を渡って西へ進むと通町(とおりまち)に至る。伊予・土佐・讃岐の各街道につながる町人地で、徳島橋に続く交通の要衝だった。

図1　徳島市街地の6つの島　（出所）筆者作成



藍商と船場の銀行街

この通町に、大阪の第三十四国立銀行（のち三十四銀行）が、明治12年（1879）7月、同行初の支店となる名東（みょうどう）支店を開店した。当時の徳島は高知県に属し、名東は徳島市街が属する郡の名前である。頭取は、藍と縁の深い木綿問屋の岡橋治助だった。同行は、翌年に分離独立した徳島県下の美馬郡・三好郡（県西部）を除く国庫金出納を受託する。店舗はのちに新町川南岸の西新町へ移った。昭和8年（1933）12月に鴻池、山口銀行と合併し三和銀行となった後も、昭和24年（1949）まで国庫金を受託した。

地元初の銀行は、第三十四国立銀行の進出に先立つ明治11年（1878）12月、旧藩主の蜂須賀家と旧藩士らが設立した第八十九国立銀行（同・八十九銀行）である。同行は県西部の国庫金の出納を受託していた。創業地は寺島町だがのちに西新町に移る。業況が振るわず明治42年（1909）に解散した。

徳島県の成立後、里程元標は徳島橋から西横町（い

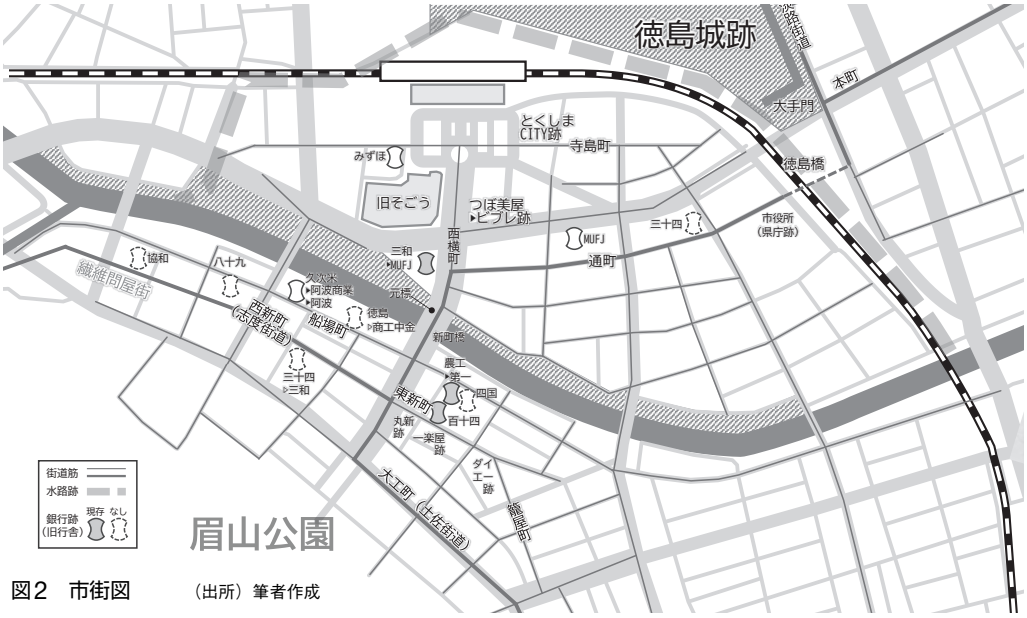


図2　市街図　　（出所）筆者作成

まの元町通り）の新町橋北詰へ移り、街道の起点も新町川のほとりとなった。街の中心が通町から、川をはさむ船場や西新町へ移ったのである。背景には阿波藍の隆盛があった。藩政期以来の特産物で、吉野川流域の藍作には大量の肥料を要した。北前船などが北海道から運んだ鰊粕は鳴門の撫養湊で陸揚げされ、藍玉は大坂や江戸をはじめ全国へ積み出された。

明治期に入ると、藍の需要は綿製品とともに伸びた。藍商人が蓄えた資本で興した銀行もある。明治12年（1879）11月、豪商・久次米兵次郎は西船場町に久次米銀行を開いた。資本金50万円は当時の私立銀行で三井銀行の200万円に次ぐ規模だった。全国に広がる久次米の藍の販路に合わせて東京や福島県にも支店を出し、淡路島や福島県郡山の国庫金を受託した。しかし、わが国最初の資本主義恐慌とされる明治23年（1890）の恐慌で行き詰まり、同行は翌年に休業する。資産と負債は関東部と関西部に分けられ、徳島本店などを継いだ関西部は明治25年（1892）1月に合名会社阿波銀行となった。整理会社のため解散し、明治29年（1896）6月、その株主が阿波商業銀行を設立した。現在の阿波銀行である。設立の経緯から堅実経営を行是とした。長期貸出による資金の固定化を避け、商業金融に注力する趣旨を行名に「商業」として込めた。

図3　旧阿波農工銀行　　（出所）筆者撮影



藍商人の銀行はもうひとつあり、明治15年（1882）3月、藍玉商の大串龍太郎らが徳島銀行を設立した。大串は、徳島鉄道や徳島電灯の設立にも関わった実業家である。同行は徳島県の出納を受託し、阿波商業銀行に次ぐ県内有力行となったが、金融恐慌期に破たん。昭和3年（1928）5月、阿波商業銀行に営業譲渡した。

綿糸は明治23年（1890）に国内生産が、30年（1897）には輸出が輸入を上回る。明治26年（1893）から36年（1903）にかけて、綿糸の国内消費と葉藍の収穫量は、ともに約1.7倍になった。しかし藍商の繁栄は明治末に陰る。徳島県の藍の作付面積は明治36年（1903）の15,099haをピークに、インド藍や合成藍の輸入に押されて急減し、大正元年（1912）には2,888haと、10年足らずで5分の1になった。

農工業の長期資金は半官半民の農工銀行が担った。徳島県では明治33年（1900）8月に阿波農工銀行が設立され、昭和12年（1937）3月に日本勧業銀行に合併された。東船場町には昭和3年（1928）建築の旧本店が現存する。戦後、第一勧業銀行、みずほ銀行の徳島支店として使われた。また、徳島は高知に本店を置く四国銀行の店舗も多い。大正15年（1926）6月に、四国銀行と同じく安田銀行系で徳島に本店があった関西銀行を合併したからだ。関西銀行の本店を徳島支店とし、ほかに県内21店舗を引き継いだ。四国銀行は昭和63年（1988）まで徳島市の指定金融機関でもあった。

鉄道の開通と東新町の百貨店

大蔵省『主税局統計年報書』によれば、藍の作付面積ピークの翌年、明治37年（1904）の最高地価は東新町だった。徳島駅の正面からのびる道で新町橋を渡った先の、西新町と道をはさんだ向かい側である。

中心が新町橋の川上の西船場から、川下の東船場や東新町へ移った背景には鉄道の開通もあった。明治後半には、寺島に置かれた徳島駅と新町を結ぶ西横町が駅前通りとして、城下の新たなメインストリートとなった。明治32年（1899）2月、徳島鉄道が徳島から吉野川上流の鴨島（かもじま）間を開業し、徳島駅ができた。明治40年（1907）に国有化され、のちの徳島線となる。徳島から鉄道は3方向へ延び、いずれも舟運や海運と結びついていた。最初は吉野川流域である。紀伊水道方面には阿波国共同汽船が大正2年（1913）、徳島・小松島間に鉄道を敷き、小松島で大阪や和歌山行きの汽船に連絡した。大正6年（1917）に国に買収され、のちの牟岐（むぎ）線・小松島線となった。

鳴門方面には阿波電気軌道が大正5年（1916）、吉野川北岸の古川―撫養間を開業した。吉野川に橋を架けられず、徳島市街とは船で結んだ。昭和8年（1933）に国有化され、のちの鳴門線（一部は高徳線）となる。

東新町には、昭和9年（1934）3月、木造3階建の新町百貨店が開店した。テナント26店の寄合形式だったが、翌年、店主らの出資で株式会社を設立し、店章の○新にちなみ丸新百貨店へ改称した。昭和13年（1938）には5階建の新館を建てた。これに先立ち、昭和10年（1935）11月には隣地に一楽屋百貨店が開店。明治19年（1886）創業の呉服店が前身で、鉄筋コンクリート造4階建だった。両店を核に商店街や映画館が集まり、東新町は戦後も徳島の買い物と娯楽の中心となった。

新町から駅前への重心移動

昭和20年（1945）7月4日の大空襲で市街の約6割が焼失。戦後は県知事施行の戦災復興土地区画整理事業が進み、駅前広場も整えられた。戦後最初の最高路線価も東新町で、昭和33年（1958）は「東新町宮川洋品店付近」だった。昭和46年（1971）には籠屋町にダイエー徳島店が開店。この頃が新町のピークで、日曜日の来街者は約4万人を数えた。

商業の重心を動かしたのは徳島駅前の再開発である。駅前地区と新町地区を2つの核として整える「二眼レフ構想」の下、徳島駅前西地区の再開発が動き出した。昭和52年（1977）3月に再開発協議会が発足し、昭和58年（1983）10月に再開発ビル「アミコ」が開業。核店舗として徳島そごうが入った。アミコの店舗面積は26,687m^{2}で、当時の丸新の7,898m^{2}の3倍を超えた。駅前にはそれ以前から、昭和39年（1964）3月に百貨店となったつぼ美屋があった。駅前広場の東側では、昭和47年（1972）9月に南海ショッピングプラザが開店。同店は徳島そごう出店を半年先に控えた昭和58年3月、ファッションビル「とくしまCITY」に改装した。

中心商業地は東新町と駅前の2核となったが、規模で勝る駅前に人の流れは次第に傾いた。小売販売額も、昭和57年（1982）は新町地区502億円、駅前を含む内町地区320億円だったが、昭和60年（1985）には内町492億円、新町423億円と逆転した。最高路線価地点も、平成4年（1992）には「元町1丁目プラザハレルヤビル前元町通り」、徳島そごうの正面に移った。

橋と郊外の吸引力に揺らぐ中心街

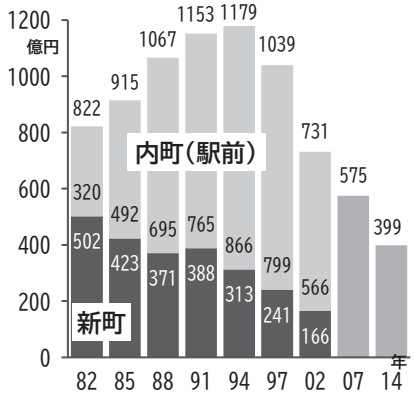
駅前に客足を奪われた東新町の衰退ぶりは明らか

図4　広域図　（出所）地理院地図vectorに筆者が加筆して作成



だった。西武百貨店を巻き込んだ再開発計画もあったが、バブル崩壊で頓挫した。万策尽きた丸新は平成7年（1995）3月、61年の歴史に幕を下ろした。売上高のピークは、徳島そごう開店前の昭和58年（1983）2月期の116億円だった。丸新閉店の翌年の平成8年（1996）、新町地区への日曜日の来街者も約7,300人まで減った。

図5　中心市街地の小売売上高



（出所）経済産業省「商業統計調査」から筆者作成

もうひとつの転機は、平成10年（1998）4月の明石海峡大橋の開通である。同橋を利用する四国・京阪神間の高速バスでは徳島発着が最も多く、開通初年度に142万人、その後約5年で年間200万人に迫る規模となった。関西との結びつきは陸続きになって一層強まり、神戸など対岸の大都市へ買い物客が流れた。郊外大型店の攻勢もあった。平成13年（2001）のフジグラン北島に始まり、マルナカ徳島店、ゆめタウン徳島、イオンモール徳島が平成29年（2017）までに相次いで開業した。東新町の空洞化はさらに進み、平成17年（2005）11月にダイエー徳島店が閉店。その後の日曜日の来街者は2,000人前後で推移し、ピークの5%程度にとどまる。

最高路線価地点は平成19年（2007）、徳島そごう前の元町通りから、一番町3丁目徳島駅前広場通りに移った。駅前広場バスターミナル側南面である。中心商業地の地盤沈下を映す一方、高速バスの拠点として駅の役割が高まったともいえる。橋と郊外の両方から客を奪われたのは駅前も同じだった。徳島そごうの売上高は平成5年（1993）2月期の444億円がピーク。平成20年（2008）2月期から13年連続の減収となり、令和2年（2020）2月期にはピーク時の3割に満たない124億円まで減った。同年8月に閉店し、徳島県は山形県に次いで全国で2番目に百貨店のない県となった。

水辺のポテンシャルに見る再生の芽

徳島市の中心市街地活性化基本計画（令和4〜8年度）は、まちなかの歩行者通行量を令和2年度の15,697人から20,807人へ増やす目標を掲げた。令和7年度は13,607人で、基準年度を13%下回った。再生に向けた取り組みは進むが、数字の上では成果はまだ見えない。

図6　新町川の水辺の景観



（出所）筆者撮影

一方、かつて舟運を支えた川を活かす取り組みは続く。新町川と助任川に囲まれた一周約6キロの中心部は「ひょうたん島」と呼ばれ、新町川を守る会が周遊船を運航している。眉山を借景に川面が広がる水辺の街で、川沿いには藍商と銀行の時代をしのばせる建物も残る。さる10月17、18日にはアニメの祭典「マチ★アソビ」が駅前から新町川両岸の街なかで開かれ、2日で8万6,000人が集まった。1日あたりでも最盛期の新町の来街者数を上回る。

訪れてみて感じたのは乗り継ぎ面の課題だ。神戸側の舞子では駅、商業施設、高速バス乗り場がつながるものの、外からは分かりにくく、乗り場は切符売り場のない高架上バス停にすぎない。淡路島・徳島方面の玄関口として、商業施設を併設した大規模ターミナルに整えれば、潜在力はいっそう生きよう。徳島駅前でも、バス会社別のチケット売り場と観光案内所を1か所にまとめたい。平坦な街なかで電動アシストのレンタサイクルを充実させれば、水辺を巡る人はなお増える。市役所前には、東京の日本橋にあたる徳島橋があった。復元すれば往時のにぎわいが伝わる観光資源になるだろう。

プロフィール

大和総研主任研究員　鈴木 文彦



仙台市出身、1993年七十七銀行入行。東北財務局上席専門調査員（2004-06年）出向等を経て2008年から大和総研。主著に「自治体の財政診断入門」（学芸出版社）、「公民連携パークマネジメント」（同）